

苦しみを抱えながら不朽の仕事を成し遂げた 『ナイチンゲール伝 図説 看護覚え書とともに』

茨木 保 著

評者：鈴木 晃仁 慶應義塾大学・医学史

フロレンス・ナイチンゲール(1820～1910)は、クリミア戦争(1853～1856)におけるスクタリの陸軍病院の傷病兵の看護で国民的英雄となり、帰国後に、イギリス陸軍の衛生・看護の改革、イギリス帝国に編入されたインドの衛生の改革、急激に拡大していた病院における看護の改革などに活躍した女性である。1859年に出版された『看護覚え書』は改訂されながら版を重ね、現在では世界中で200以上の言語に翻訳されている。今も医療の現場でも存在感がある歴史上の人物である。

偉大な人物の常として、どの時代もそれぞれのナイチンゲールの像を描いてきたし、同じ時代においても、信条や視線の違いによって、異なったナイチンゲールの姿が映し出されてきた。当初は傷病兵を見守る「灯を持った婦人」として女性らしい献身とキリスト教精神の発露の象徴とされ、行政学者も、統計学者も、フェミニストも、それぞれの立場からのナイチンゲールを描いてきた。

本書が描くナイチンゲール像は、このような解釈を受け継ぎながらも、白衣の天使というありきたりのイメージから大きく離れたものである。特に後半において、悩み苦しみ傷つくと同時に周囲の人々を傷つけながら超人的な仕事をした姿が、等身大の視線で描かれている。

クリミアから帰国した彼女を駆動したのは、スクタリで目にした悲惨な光景であり、「生きた骸骨」のような兵士たち、全身にうじ虫が湧くなかで、毛布で頭を隠して、一言も言わずに死んでいった男たちの姿の記憶であった。本書では描かれていない、彼女自身が責任をもって管理した病院の死亡率が最も高かったという事実が、

● A5 頁 208 2014 年 定価：本体 1,800 円 + 税 [ISBN978-4-260-01840-1] 医学書院刊



彼女自身を苦しめていた。その記憶が悪霊のように彼女に取りつき、自責の念と、常軌を逸した活動力と、それと裏腹の感情の激しい起伏を作り出していた。英雄化と聖人化の賞賛が呪わしいものにしか思えない中で、寝たきりの状態で崩壊寸前の人格を抱えて狂ったように仕事をしていた。人々を巧みに用いて新しい組織に統率しながら、家族や公私にわたって頼った友人たちもが絶望と侮蔑の言葉を投げかける対象となった。このような人格の変化は、医史学の通説では、1995年のBMJ掲載論文に従って、クリミア戦争中に罹患したブルセラ症の慢性的な経過とするが、本書は、これをPTSDや深層心理の問題として描いている。その解釈がある側面を捉えている可能性は否定しない。いずれにせよ、この疾病のために、性格も以前とはすっかり変わったものになり、彼女の体型は崩れて肥満した(作者はそのような似姿を描いていない)。白衣の天使であり陸軍とインドの衛生と看護の改革者であり統計学や女性の職業の導入者であった彼女は、それと同時に、慢性疾患の患者であり心身の障害者であった。

本書は、そのような苦しみを抱えながら不朽の仕事を成し遂げた新しいナイチンゲールの像を描く優れた作品であり、医療を学ぶ学生に強いインパクトを持つ絶好の書物である。全体の3分の2が伝記、残りの3分の1は「図説 看護覚え書」で占められている。誰もが親しむことができる漫画で描かれたこの書物を学生、特に新入生たちの推薦図書としてぜひ薦められたい。